発達障害のある子どもへの支援について

ー特別支援教育研究センターの取り組みー

Komatsu Megumi
小　松　　愛
奈良教育大学 特別支援教育研究センター

発達障害のある子どもへの支援について

－特別支援教育研究センターの取り組み－

奈良教育大学　特別支援教育研究センター　小松 愛

1. はじめに

私は奈良教育大学の中にある､特別支援教育研究センターに所属しています。この特別支援教育研究センターがどういうところかというと、発達障害のある子ども（未就学～高校生）を対象に本人や保護者の方からの発達相談を受けたり、学校関係者へのコンサルテーション、子ども向けプログラムの運営、一般や学生に向けた研修や講演の企画運営、調査研究などを行う専門機関です。その中で、私は臨床心理士、公認心理師として主にアセスメントを含めた発達相談業務、プログラムの運営を担当しています。

今回は、実際にセンターでどんな活動をしているのか、プログラムについてはその成果にも触れながらご紹介していきたいと思います。

2. 発達障害と特別支援教育

まず、発達障害について簡単に説明しておきます。今は発達障害に関する情報がたくさん広まっていますし、当事者の方も色々な方法で発信していますので、皆さんも聞き馴染みがあるのではないでしょうか。医学的(1)には「神経発達症」という一群に該当し、運動機能の発達がゆっくりだったり、身体の使い方が不器用だったり、感覚や物事の捉え方・コミュニケーションの取り方が独特だったりするという特徴が見られます。診断としては､「知的発達症（ID)」、「自閉スペクトラム症（ASD)」､「注意欠如・多動症（ADHD)」､「限局性学習症（SLD)」などがあります。

こうした発達障害のある人は、能力面に凸凹があることが多いです。興味関心が狭いということもよく聞きます。ある状況ではとても優れた能力を発揮できるけれど、違う状況では極端に困難さが目立つ、というアンバランスなイメージです。そのため部分的に出来ないのは怠けているせいではないかとネガティブな評価をされるケースも少なくありません。自分でもなぜ失敗を繰り返すのか分からず、自分で自分の力を信じられなくなる人もいます。このような状態が続くと二次障害と呼ばれる、身体症状や精神症状、悪化すると精神疾患を引き起こす危険性があるため、早めに対処する必要があると言われています。

今から 15 年前の平成 19 年、学校教育法の改正により「特殊教育」から「特別支援教育」へと移行し、従来の障害に加え、知的に遅れのない発達障害も含め特別な支援を必要とする子どもが特別支援教育の対象であると明文化されました(2)。障害のある人もない人もお互いを尊重し認め合える「共生社会」の形成に向け、学校現場ではインクルーシブ教育システムの構築によって多様な子どもたちが共に学ぶ仕組みが目指されることになったのです(3)。例えば教室で、一斉に向けた説明や指示が上手く理解に結びつかなかったり聞きそびれてしまったりして、周りの子から遅れることがあります。衝動的に手や口が動いてしまい、お友達と衝突することもあるでしょう。そのような生活や学習上の困り感を持つ子どもに必要な支援や合理的配慮を提供し、学校での不適応を減らすことが特別支援教育では求められています。個別に声掛けをするというのも 1 つの支援ですし、あるいは手順ややるべきことを提示して皆が確認できるようにしておくのも良い支援方法だと思います。後者のように、同じ教室、同じ空間で多様な子どもが一緒に学び合うことができるような、全員にとって分かりやすい指示や授業になるよう学校全体で工夫していくことも期待されています。

3. 発達障害の診断とアセスメントで見ているもの

ここで注意しておきたいことが、発達障害として挙げられる特徴が見られるからといって、イコール診断がつくわけではないということです。社会生活の中で障害状態にあるかどうかが重要なポイントになります。つまり、家でも学校でも皆に理解され、困り感なく過ごせている場合は「障害」とはならないのです。一方で、その子の特性と環境とが合わないと、適応が難しい状態、「障害」

状態にあると判断されます。また、発達障害の診断があっても、その特性や程度は本当に人それぞれです。どんな支援が必要かもバラバラです。そこで必要になってくるのが、「アセスメント」という作業です。

では、子ども一人ひとりのことを、一番よく知っているのは誰でしょうか。もちろんご家族であり、また学校の先生など身近な関わりのある人たちでしょう。何より、子ども本人が一番分かっているはずです。ただ、自分の言葉では上手く説明できない部分や、普段の生活ではあまり見えてこない部分があるので、心理発達検査を通して情報を整理しようというのが私たちの行っているアセスメントです。子ども本人や身近な方に協力してもらいながら、様々なツールを使って目の前にいる子がどんな子なのかを教えてもらっているのです。

一般に広く使われている検査の中で、ウェクスラー式の知能検査があります（WISC や WAIS など、対象の年齢で種類が分かれています）。人の知的能力を測ることを目的とした知能検査の歴史は 20 世紀に遡りますが、ウェクスラーが開発した知能検査の登場により、「支援のためのツール」としての意味合いが増し、改訂を繰り返しながら様々な現場で活用されるようになりました[3]。知能指数（IQ）という数値に表される個人の認知的な特性が分かると、そこから個人の得意な部分、苦手な部分が見えてきます。発達障害のある人は能力面に凸凹を抱えていることが多いと述べましたが、特性を捉えることができれば、得意なところを伸ばして長所にしたり、得意な部分を活かして困難さをカバーしたり、別の工夫で苦手さを補うなど支援を考える手がかりになります。ただし、たった 1 つの検査だけで子どもの多様な姿を把握できるわけではありません。そのためアセスメントの際には、テストバッテリーと呼びますが、色々な方向から測る検査を組み合わせて行います。また、繰り返しになりますが、同じような能力のある子どもでも置かれている環境によって困り感の現れ方は違ってきます。そのような環境要因についても発達相談の中で聞き取り、問題となっている状態を裏付けられる＝説明できるように検査を選択しています。

アセスメントを通して私たちは、診断の有無に関わらず子どもの発達状況や能力面の特徴といった様々な情報を整理し、支援の手がかりとなるよう本人や保護者、学校の先生など周囲の人に伝え返す役割を担っています。

4. 実際に子どもの支援に繋げる

アセスメントの結果を生かすためには、どうすれば良いでしょうか。センターでは、検査を担当した相談員が検査結果について本人や保護者に直接説明を行っています。もちろん、予想通りの結果だったという感想を聞くことが多いですが、客観的に見てもここがポイントになりますね、ということを共有することができれば支援の方向性が定まっていきます。同じく学校の先生に説明する機会がありますが、教室で見られる行動に納得がいったという場合や、そういう背景があるとは気付かなかったと驚かれる場合もあります。そこから認識の変化、関わり方の変化が生まれます。

発達障害のある子どもの支援を考えるうえで何がハードルになるかと言うと、「目に見えない障害だからこそ理解が得られにくい」という点です。だからこそ、困り感の中身を見える化することが大切なのです。家庭と学校が共通理解を持つことができれば、子どもに対して一貫した対応を取ってもらえたり、本人なりの工夫やチャレンジを後押ししてもらえたりし、子ども自身が落ち着いて過ごせるようになるという、ポジティブな連鎖が期待できます。

また、個別の支援のほかに学習支援プログラムと社会性向上を目的とした小集団プログラムも実施しています。学び方に工夫が必要な子どもや同年代との交流が難しいという子どもが、自分のことを受け入れたり、自分の持ち味を生かした社会との繋がり方を学んだりできる場になればと考えています。

学習支援プログラムは、学習障害や注意欠如・多動症といった様々な発達障害特性によって通常の学習方法では成果が出にくいという子どもを対象にしています。事前に発達相談と心理発達検査を実施し、特性を把握したうえで課題の設定や学習方法を考えていきます。例えば、漢字をなかなか覚えられないという A さん。アセスメント結果から、見たものを正しく記憶しておく力が弱いことが分かると、定着させるための方法として漢字のパーツに注目させるような課題を使用したり、書き順を言葉やエピソードで印象付ける覚え方を取り入れたりします。ただ繰り返し書くというのではすぐに飽きて疲れてしまう子どもも、工夫や遊びを合わせると意欲的に取り組んでくれることが多いです。また、センターは大学生の実地研修の場としての機能も有しており、大学生に学習指導のスタッフとして参加してもらい、担当している子どもの課題作りをお

願いしています。一人ひとりの特性をふまえつつ、語彙を増やすためにかるた遊びを取り入れたり、お金の計算を練習するためにお買い物ごっこができるようなグッズ(図 1)を作ったりと、ユーモアを織り交ぜながら課題を用意してくれています。そのおかげで、勉強がメインの集まりですが、子どもたちは苦手意識を持たずに楽しく参加できていると感じています。

図１　学生作・お買い物グッズ

もう一つは、自閉スペクトラム症の子どもを対象にしたプログラムです。自閉スペクトラム症に見られる特性として、こだわりや特定の事柄に物凄い集中力を発揮するといったものがあります。そうしたユニークさを生かして社会との繋がりを持ってもらおうと、「鉄道好き」に着目したプログラムが始まりました。このプログラムでは、自閉スペクトラム症の認知特性に合わせて次のような合理的配慮と環境設定がされています[5]。

1)ポジティブな動機付け	「好きなことを追求できる場所」として募集 メンバーズカードの発行など特別感のある演出
2)予告とリハーサル	日程や活動内容を事前周知、お手本、リハーサルの実施
3)メンバー間の交流	共通の目標に向けての自然な交流、振り返りの機会
4)場の構造化	毎回の活動内容を明確にしておく
5)他者視点の意識	一般向けの成果発表会の実施

また、運営スタッフとは別に、鉄道に詳しい大人を「サポーター」として迎え、子どもたちの憧れや鉄道話への欲求を満たしてくれる存在として活躍していただいています。

初年度は 2 か月に 1 回、2 年目以降は概ね 1 か月に 1 回のペースで集まり、各年度末には家族や招待者に向けた成果発表会を開催しました。成果発表会では「自分以外の人にも分かるように伝える」ことを意識できるよう、スタッフが鉄道に詳しくない一般の人向けであると強調したり、軌道修正をしたりしながら進めました。それぞれ発表したい内容（鉄道の写真紹介、鉄道模型の動画、鉄道クイズなど）によってチーム分けをし、スライドや動画を準備していく中で自然発生的に子ども同士のやり取りが生まれ、チームのために自分が出来る

ことを担当するという責任感や役割意識も芽生えていたように思います。その他の活動では、日頃の鉄オタとしての活動報告や、大回り乗車[1]のルートをチーム対抗でプレゼンし、最も魅力的だったチームのルートをメンバーで実際に巡る遠征に出掛けたり、鉄道技術研修センターへの遠足を実施したりしました。2021 年度は技術科の先生の協力のもと、オリジナルの社章をテーマに 3D プリンターで満足度の高いグッズを作成しました（図 2）。

図２　鉄オタ倶楽部メンバー作品

このプログラムの効果を検討するために、年度毎にメンバーと保護者に対して仲間関係や自己効力感、向社会性に関するアンケート調査を行い、データを集めています。大西ら⑸と富井ら⑹の報告によると統計上は効果が確認できませんでしたが、メンバーを集めた振り返りの中で、「趣味が合う友達が学校にいないため、ここで仲間ができてすっきりした」という発言が聞かれました。参加メンバーは小学生から高校生と幅広い年齢層ですが、それぞれが複数のジャンルにまたがって精通している場合がほとんどで、1 人が何かしら発信するとすぐに周りが反応し盛り上がることが多々あります。子ども同士で連絡を取り合って電車を撮影しに行くこともあり、仲間関係は十分に築けていると言えます。アンケート結果に変化が表れなかった理由として、日頃の生活状況が大きく影響してくる質問項目だったことが挙げられます。プログラムの中での関係性は深まりましたが、あくまで特別なもので、生活全体を通して考えるとまだまだ難しさを抱えているのかもしれません。

昨年度からは、活動の場がオンラインに移行されました。さすがに子どもたちはタブレットやパソコンの扱いに長けていて、問題なく参加出来ています。しかし、もともとの特性である場の空気、テンポの読めなさの問題が、オンライン上では強く表れているように思います。このあたりの要因も子どもたちの心にどのように影響を与えるのか、検証を続けていきたいと思います。

---

[1] JR の場合は大都市近郊区間と呼ばれる決められたエリア内を、ルート上の重複なし・途中下車なしであれば最短経路の運賃で乗車できるという乗り方。活動内では、JR 奈良駅～JR 王寺駅間で奈良・京都・滋賀・大阪を回るルートが採用されました。

5. おわりに

ここまで発達相談やアセスメント、小集団グループなど様々な支援内容をご紹介してきました。発達障害に限りませんが、支援を考えるうえでは何よりもまず、相手を知ること、理解しようと努力することが大切だと思っています。そのためには物事を柔軟に受け入れられる心が必要です。

学生生活を送っていると、誰しもどこかでつまずきを経験するでしょう。勉強や対人関係が上手くいかない、努力しているのに成果が出ない、気持ちが前向きにならないなどなど…。打つ手なしと思うこともあるでしょうが、視野を広げ、視点を変えて何か少しでも変えられること、工夫できることはないでしょうか。便利なアイテムを使っても良いですし、人の力を借りても良いと思います。時には休むことが有効な場合もあります。そうして乗り越えた経験は、子どもの教育や支援の場で必ず生きてきます。

是非皆さんには、これからたくさんの人やものと出会い、学び、色々なことを柔軟に受け入れられる心を育んでいってもらいたいと思います。

参考文献

(1) 日本精神神経学会(2014) 『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』

(2) 文部科学省(2007) 「特別支援教育の推進について」(通知)

(3) 中央教育審議会(2012) 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」(報告)

(4) 上野一彦・松田修・小林玄・木下智子(2015) 『日本版 WISC-Ⅳによる発達障害のアセスメント―代表的な指標パターンの解釈と事例紹介―』 日本文化科学社

(5) 大西貴子・富井奈菜実・中西陽・小松愛・根來秀樹(2021) 自閉スペクトラム症のこだわりを生かした社会性促進プログラム―奈良教育大学「鉄オタ倶楽部」の開発― 児童青年精神医学とその近接領域, **62**(2),241-258.

(6) 富井奈菜実・大西貴子・中西陽・小松愛・根來秀樹(2020) 自閉スペクトラム症の「こだわり」を生かした「奈良教育大学鉄オタ倶楽部」の取り組み 奈良教育大学紀要, **60**(1),1-14.

小松　愛（Komatsu Megumi）

2013 年　鳥取大学大学院 医学系研究科臨床心理学専攻
修士課程修了（臨床心理学修士）
以降はスクールカウンセラー、大学学生相談室、
精神科クリニック、精神科病院等にて勤務
2019 年　奈良教育大学 特別支援教育研究センター 相談員
2021 年　同センター 特任講師

【研究テーマ】臨床心理学。学生時代から子どもの愛着の問題や学校不適応に関心があり、アンケート調査やインタビュー調査をしてきました。現在もカウンセリングや心理検査などの実践を通して、子どもの適応の姿について考えています。

【趣　　味】カメラで写真を撮ること。携帯でも十分綺麗に撮れますが、やっぱり光の感じや色の表現が違うな～と嬉しくなります。自己満足です。

【尊敬する人物】大学院在学中から卒業後数年間まで、スーパービジョン（カウンセリングの指導助言）を担当してくださっていた心理の先生です。今もこの先生だったらどう言うだろう？どんな反応を返すだろう？と考えながらカウンセリングを行うときがあります。

【高校生のときにやっておけばよかったこと】
色んなジャンルの本を読むこと。何かに没頭すること。柔軟にインプットできるうちにしておけばよかったなとよく思います。

発達障害のある子どもへの支援について

－特別支援教育研究センターの取り組み－

著者　小松（こまつ）　愛（めぐみ）
2022 年 4 月 1 日 第 1 版
奈良教育大学出版会
〒630-8528
奈良市高畑町
TEL: 0742 (27) 9343　FAX: 0742 (27) 9147
E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp
URL: https://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/